

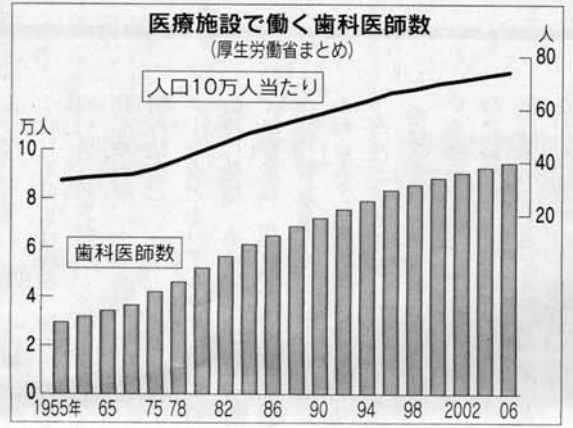
戦後右肩上がりが増え、総数が9万4千人を越えた。医師。一方で子どもの虫歯は大幅に減り、一般の医師と逆に「過剰」が指摘される。大学歯学部部の定員削減も進まず、開業しても厳しい競争に直面している。従来の「削って詰める」治療では増収は期待できず、虫歯予防へのシフトや設備充実などで開業医は生き残りに懸念だ。

神奈川県藤沢市の歯科医、小出一久さん(45)が11年前に現在の場所に移転開業した時、周囲には8軒の歯科医院があり、多い時には16軒にまで増えた。患者を確保しようとして入れ歯治療を中心に据え、タウン誌などでアピール。多忙時には1人で1日40人を診た。「薄利多売の時期が長く、経営が安定するのには8年ほどかかった」という。

だが、2006年の診療報酬改定で治療内容などを記載する「診療情報提供書」を定期的に患者に渡すことが必要に。新たに文書作成負担が増えたのがきっかけで肩を痛め、右腕が上がらなくなった。加えて視力低下と老眼も顕著に。「歯科医は外科と同じで目と利き手が命。両方を痛めて自信を喪失した」のがきっかけでうつ状態になった。3カ月ほどかかってうつを脱してからは、診療ベースを落としている。「歯科医院の経営は激流を逆らって上るようなもの。その激流から飛び降りる決意が必要だった」と小出さんは振り返る。

厚生労働省によると、医院などで働く歯科医師の数は06年で9万4593人と、医師

虫歯の子どもも減少・診療報酬下げ...



歯科医過剰 生き残り模索

「うちを買ってくれないか?」。仙台市を中心に7カ所の歯科医院を経営する「かさほら歯科医院」(仙台市宮城野区)の笠原一規院長(39)は毎月、首都圏などの同業者から打診を受ける。7カ所のうち4カ所は、経営難や院長の高齢化で廃業の危機に陥った医院を買ったもの。相談は年々増え、「虫歯治療という従来型の診療では生き残れないのかもしれない」と笠原院長は感じている。

競争を勝ち抜くために予防にシフトするなど、各歯科医院の工夫は様々だ。「こいけ

で最も多い内科医の7万470人より多い。人口10万人当たりの歯科医師数は1955年には33.0人だったが、ほぼ一貫して増加し、06年には2倍以上の74.0人に。歯科医は大半が開業するため、診療所数も78年の3万5538カ所から08年には6万8076カ所にまで膨らんだ。

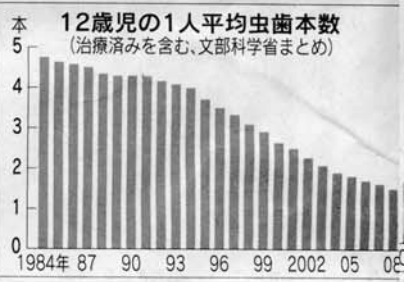
一方、文部科学省の学校保健統計では、12歳時点の治療済みも含めた平均虫歯数が、



81年の4.75本から08年には1.51本に減少。歯のエナメル質が未成熟で虫歯になりやすい子供は歯科医の「お得意様」だったが、フッ素配合の歯磨き粉の増加などから虫歯そのものが減少している。歯科医が増える半面、患者

託児所の様子を画面で確認できる「かさほら歯科医院」(仙台市宮城野区)

予防やケアにシフト 託児所など設備充実も



採用。唾液(だえき)の分泌量や口内の細菌量などを調べ、虫歯になるリスクをパーセントで示し、キシリトール入り甘味料の摂取を勧めたり、フッ素を塗ったりする。

小池匠院長(49)は「最初の2、3年は続けて受診してくれる人が2割程度だった」というが、利用者は徐々に増え、現在は診療に関する収入の6〜7割が自分で価格を設定できる自由診療に。「保険診療は歯を削れば削るほど収入が増える仕組み。ついつい『この歯も削っておこうか』となり、患者もつらい思いを

「と小池院長は話す。治療に使う器具をすべて毎回滅菌処理し、1つずつ個別にパックし直しているほか、アロマオイルで薬品のおいを消したり、清潔感と快適さを保つ工夫も怠らない。

現在同医院では患者の4割が予防目的という。

「歯科医と医療機関が増え、需給バランスの不均衡がみられる。歯科医の10、20%の抑制は必要と考えている」と、日本歯科医師会も危機感を強める。診療報酬引き下げが歯科医の所得減につながっている指摘。今後の対策については「要介護高齢者や障害者など、これまで手の行き届かなかった分野でのサービス拡大も必要。問題解決に向けて努力する」としている。

治療室にモニター 同院では2階のアパートの一室を託児所として活用。患者が治療室のモニター画面で、子どもの様子を確認でき

「歯科医と医療機関が増え、需給バランスの不均衡がみられる。歯科医の10、20%の抑制は必要と考えている」と、日本歯科医師会も危機感を強める。診療報酬引き下げが歯科医の所得減につながっている指摘。今後の対策については「要介護高齢者や障害者など、これまで手の行き届かなかった分野でのサービス拡大も必要。問題解決に向けて努力する」としている。

1960年代、衛生管理の認識不足で「虫歯の洪水時代」が到来し、歯科医師不足が社会問題化。その後歯科医の数を増やした。日歯が振り返る経緯は、現在叫ばれる医師不足問題とも重なる。時代の変遷で国民の健康状態やニーズががらりと変わるなか、医師はどう変わるのか。(吉田直子、倉辺洋介、佐竹実)